

## 第141回 三方限古典塾（'18, 7, 19）

### 呂 新吾（1536～1618）「呻吟語」（その14）

1 勢いの在る所は、天地聖人も違<sup>たが</sup>う能<sup>あた</sup>わざるなり。勢い來たる時は、即<sup>すなわ</sup>ちこれを摧<sup>ひ</sup>くも、未だ必ずしも遽<sup>にわ</sup>かに壞<sup>やが</sup>れず。勢い去る時は、即ち之を挽<sup>ひ</sup>くも、未だ必ずしも回<sup>がえん</sup>らす能<sup>つね</sup>わず。然れども聖人毎に勢いと忤<sup>さか</sup>らいて、甘心して之に従<sup>がえん</sup>うを肯<sup>さか</sup>ぜざるは、人事宜しく然るべければなり。  
(世運) 守屋159

(意識) 時の勢いというのは、天地や聖人の力でも逆らうことができない。勢いが来るときには、打ち砕こうとしても簡単には成功しない。逆に勢いが去るときに、引き戻そうとしても、これまた難しいのである。

だが、聖人は常に勢いに逆らい、それに甘んじて従おうとはしない。なぜなら、勢いに流されてばかりいたのではよくないということを知っているからである。

(余説) 仕事や趣味、スポーツや政治や経済など多くの場面で、時の勢い・時代の力というものを実感させられる時があります。「旭日昇天の勢い」と言いますが、登る太陽の勢いは誰にも止められずに、逆らうだけ無駄です。その逆もまた同じでしょう。

しかし、聖人に限らず、人は敢えて時の勢いに逆らうことも時には必要です。政・財界に心酔者が多かった、陽明学者の安岡正篤（1898～1983）は、「運命とは、動いてやまざるものであり、自ら創るものである」と書いています。大きな時の流れに対して、敢えていかに逆らうかということも、その人の価値を決めるように思います。

(参考) 松下幸之助 「蝶は鹿にはなれない。それは命だ。しかし、運命は100%ではない。それは90%だ。残りの10%が人間にとっては大切だ。自分に与えられた人生を、自分なりに完成させるかさせないかという、大事な10%だ。ほとんどは命によって定められているけれど、肝心なところは人間に任せられているのではないか。」

2 士君子は心気を養わんことを要す。心気一たび衰うれば、天下の万事、分毫<sup>かんこう</sup>も倣<sup>な</sup>し得<sup>ぜんきゆう</sup>ず。冉有はただこれ箇の心気足らざるなり。  
(存心) 守屋38

(意識) 君子は気力を養わなければならない。気力が衰えたのでは、いかなることも成し遂げることはできない。冉有にはこの気力が欠けていたのである。

(余説) 気力は何も君子ばかりではなく、当然のことながら誰にも必要です。肝心なことは、事態がどう展開しようとも、いかに気力を培い、維持していくかでしょう。

冉有（冉求）は孔子の弟子。政治的手腕があり、才芸もあり謙遜深かった反面では、性格はいささか消極的だったようです。

ここでの君子とは、知識に加えて徳性・表現力・判断力・決断力などを身につけた人間で、知識のみ人間は小人に過ぎません。ここまでが為政者です。それらの中心に「君」がいます。その他が「民」という構造になります。

(参考) 論語・雍也 12「冉求曰く、子の道を説<sup>よろこ</sup>ばざるにあらず。力足らざるなり、と。子曰く、力足らざる者は、中道にして廢<sup>かき</sup>す。今汝は面<sup>かき</sup>れり、と。」

(冉求：私は先生の考えに不満で実行しないのではなく、私に力が不足しているのです)

(孔子：今、お前ははじめから力不足で私の考えを実行できないと自らを限定している)

3 如今の天下の人は、之を驕子に譬ふ。敢て熱氣唐突せざれば、便ち艷然として怒を起す。縉紳は稍綜核を加ふれば、則ち苛刻なりと曰ひ、学校は稍厳明を加ふれば、則ち恩寡しと曰ひ、軍士は稍斂戢を加ふれば、則ち凌虐すと曰ひ、郷官は稍持正を加ふれば、則ち踐踏すと曰ふ。今、縦ひ敢て怨に任ぜずとも、而も公法を廢して以て恩を市することは、独り已むべからざるか。如今の天下の事は、之を敝屋に譬ふ。軽手推し扶くれば、便ち愕然として舌を咋む。今縦ひ更張せずとも、而も毀折して以て滋々壞ることは、独り已むべからざるか。 (治道) 安岡135

(意識) 今の世の中は、だだっ子=例えられる。だしぬけに興奮して、あつというようなことをやらかさないとせば、顔色を変えて腹を立てる。官位の高い人間は、事の顛末を少し調べようとすると、厳しすぎると言う。学校が、少し厳しく監督すると、思い遣りがないと言う。軍人は、訓練を少し厳しくすると、いじめると言う。地方の役人は、これを少し正そうとすると、中央が地方を踏みじると言う。

人から怨まれるのを取えて覚悟してでも、法に照らして厳しくすることはできないのか。今の天下の様子はボロ家と同じである。手を当てて支えてやろうとすと、うろたえ舌を噛むほどにがたがきている。今例え立て直しをしなくて放っておけば、ますます壊れる状態は、もうどうにもならないのであろうか。

(余説) 今日の日本の様相は、まさにここに書いてある姿と同様であり、とても400年昔の書とは思えません。全く現代の書の感があります。

戦後に首相兼外務大臣を務めた吉田茂は「歴史に学ばない国民は滅びる」と言っていますが、明るい未来の姿を描き難い我が国は、果たしてどうなんでしょうか。

(参考) 南洲翁遺訓 (29) 「道を行ふ者は、固より困厄に逢ふものなれば、如何なる艱難の地に立つとも事の成否身の死生杯に、少しも関係せぬもの也。」

(31) 「道を行ふ者は、天下挙って毀るも足らざるとせず。天下挙って譽むるも足れりとせざるは、自ら信ずるの厚きが故也。」

4 当に怨むべく、怒るべく、弁ずべく、訴うべく、喜ぶべく、愕くべくの際に、其の氣甚だ平らかなるは、これは是れ多大の涵養なり。 (広諭) 守屋34

(意識) 怨みや怒りがこみあげてきたとき、弁解や主張をしたいとき、あるいは喜びや驚きにつき動かされたときに、あくまでも冷静に対応するためには、ふだんから十分に修行を積んでおかなければならない。

(余説) 中国三国時代、蜀漢の劉備 (161~223) は「語言少なく、善く人に下り、喜怒を色に形さず」と評されています。「寡黙」「謙虚」「喜怒を色に形さず」と、リーダーに求められる三つの条件を持っていたようです。

喜怒哀楽の感情を顔に出さず、淡々と事態に対処するメリットは、特に危機管理のときに発揮され、動揺が組織全体に広がることを防ぎます。しかしその反面、下手にこれをまねると、冷たいとか取っ付き難いといったマイナス・イメージが危惧されます。

何れにしても、「喜怒を色に形さず」を行うには、平生からの涵養・修行が必要であり、先月3項には、心を「沈静」することが「涵養」を育てるとありました。

しかし、「喜怒がすぐに顔に表れる、分かりやすい人間だ」との評価?もあることで、なかなか難しいものです。